

昔話のように再話された日本の神話

―『決定版 心をそだてる 松谷みよ子の日本の神話』を入り口として―

市瀬 雅之

はじめに

日本では『古事記』や『日本書紀』『風土記』等に記された神話が、古い時代のもので知られる。特に『古事記』は、江戸時代の国学の隆盛によって、本居宣長が『古事記伝』を著したことで注目された。

ただし、児童文学の世界には、そうした古典文学の享受や研究が、直接結びついていない。明治時代には、チェンバレンの「ちりめん本」や巖谷小波の「御伽草子」等、部分的な再話から親しまれはじめたことで、『古事記』や『日本書紀』『風土記』等に記された内容が、区別されることなく受容され、変容され、再話された。大正時代に入ると、鈴木三重吉が『古事記』のみを再話した『古事記物語』を刊行したが、一つの考えを示したに留まる。テキストを定めない再話の傾向は、昭和の時代へと引き継がれてゆく。教育的には、『古事記』や『日本書紀』等に記された神話が、そのまま史実と捉えられていたところに大きな特徴が認められる。

その理解が、太平洋戦争を経て、大きく問い直されることになる。新しい読み方が、再話する作者の個々の理解に任されてゆくところに新たな展開が見出される(1)。

本稿ではその一例を、松谷みよ子(2)の『決定版 心をそだてる 松谷みよ子の日本の神話』(以下、「当該書」と記す)を入り口として確認しておく。

一、当該書の初出

当該書は、二〇一〇年(平成二十二年)十月に講談社から刊行されている。「もくじ」の末尾に注記された「おうちの方へ」に留意すると、次の三点

がその特徴を端的に表す。

●この本は『古事記』上巻と中巻を中心に、『日本書紀』『風土記』、また地域に伝わる神話からもいくつか取り上げて、構成されています。

●文中のむずかしい言葉は、一語ごとの終わりにまとめて説明をのせています。補足的な説明文や写真などは一か所のみに掲載し、ほかはそのページ数を記しました。

●この本は、一九六八年に小社より発行した『日本の神話』全二巻を底本としています。「赤神と黒神」は、高木敏雄氏の資料と、瀬川拓男氏の採集によっています。また、「ノミノスクネ」は新しく書き下ろした作品です。

一つ目は、「日本の神話」とする内容が、『古事記』に『日本書紀』や『風土記』等を、組み合わせることを明らかにしている。「はじめに」に記したように、明治時代からの再話傾向がそれを可能にするのだが、後述するように、テキストとなる文献の区別は認識されている。その上で、方法として組み合わせられている点で、無自覚な再話とは区別されよう。二つ目は、単なる読みものに終わらないことを示唆する。教育的に、授業等の副教材としての役割が与えられている。三つ目には、記された物語が、一九六八年当初に記された内容を用いていることを明記する。ここでは、三点目に着目する。

松谷みよ子の「日本の神話」に関する作品は、一覧すると次のようになる。

①『日本の神話1』『日本の神話2』一九六八年(昭和四十三)十月

十一月 講談社

② 『松谷みよ子のむかしむかし四』《日本の神話1》 『松谷みよ子のむかしむかし五』《日本の神話2》 一九七三年〔昭和四十八〕十一月 講談社

③ 『松谷みよ子の本 第九卷 伝説・神話全一卷』一九九五年〔平成七〕十月 講談社

④ 『日本の神話』二〇〇一年〔平成十三〕四月のら書店

⑤ 『決定版 心をそだてる 松谷みよ子の日本の神話』二〇一〇年〔平成二十二〕十月 講談社

当該書は、前掲①書を底本にしている。②③④書も、基本的には①書をもとに編まれている。当該書の神話理解が、一九六八年には確立していたことが知られる。

前掲①書の理解が得られた背景が問われよう。当該書の作者が、師と仰いでいた坪田譲治の『神代の物語』日本童話全集1（一九六六年〔昭和四十二〕二月あかね書房）の刊行が注目される。

その「はじめ」には、次のように記されている。

わたくしがおさないころの明治の小学校では、こんな神代の物語は、歴史としておそわりました（3）。お話というのではなく、むかし、ほんとうにあった事実として習ったのです。それから六十年、学問はすみ、人びとのかんがえかたもかわってきました。

それで、ちかごろでは、こんな神さまのことは、むかしの人が、想像でつくったお話だということになりました。しかし、わたくしには、このお話は、なんともおもしろくてならないものにおもわれるのです。

どこの国でも、その国をつくったのは、むかしむかしの神さまとなっており、したがって、国づくりのお話があります。世界でいちばんゆめいなのは、ギリシア神話です。この日本の話も、けっして、ギリシア神話に負けはしません。とにかく、二十年來の友だち松谷みよ子さんと

力をあわせて、いっしょけんめい書いたものです。

どうかおよみになってみてください。

「わたし〓坪田（市瀬注）」の経験として、明治時代の尋常小学校では、日本の神話が「歴史」として、「事実」として学習されていた。「それから六十年」とあるので太平洋戦争後に、「学問や人々のかんがえかたもかわってきました」と、考え方の転換がはかれたことを記す。「ちかごろ〓戦後（市瀬注）」は、「事実」から「むかしの人が想像でつくったお話」と解されていることが示されている。留意すべきは、その先が「しかし」と逆説的に展開されている点であろう。漠然とはしているが、「わたし」には「なんともおもしろくてならないもの」と捉えられている。神が国を作る話はこの国にもあり、ギリシア神話を顕著な例に挙げながら、日本の神話も相当すると位置づけられる。

その後、この一冊が、「二十年來の友だち、松谷みよ子さんと力をあわせて、いっしょけんめい書いたものです」とある。

「もくじ」は、次のとおりである。

天のはじめ 地のはじめ／ヨミの国／天の岩屋／やまたのおろち／ふくろをせおつた神／天からのつかい／日向の宮／海幸彦 山幸彦／金色のトビ／七おとめ／三輪山の神／サホヒメの死／白鳥の皇子／富士山と筑波山／夜刀の神／白鳥の里／国びき／ワニにくわれたむすめ／捨て子をしようとしたオオアナムチ／オトヒヒメコ／シカの夢知らせ／浦島子／天女／北海の神／時じくの香の木の實／アメノヒボコ皇子／春の神と秋の神／メドリの王／枯野船／アカイユの歌／葛城山のイノシシ／エゾイタチの女神／いうことをきかない男の子／解説「神代の物語」について

末尾の水藤春夫（4）の「解説」（「神代の物語」について）が、その構成を詳しく記す。

この『神代の物語』には、日本で、いまのこっているいちばんふりい書物、「古事記」「日本書紀」「風土記」から、代表的で、おもしろいお話をえらんでのせてあります。

と記しはじめ、『古事記』と『日本書紀』の成り立ちを、それぞれの特徴を交えて紹介する。それらは「もちろん、純粋な文学書ではありません。ことに、『書紀』は、もともと、ただししい国史を編集する目的でつくられたものです」と解する。その上で、

(前略)しかし、神代の巻の物語——ふつう、日本神話といわれるもの——は、もちろん、この本のなかにあるいろいろの物語は、まことにまことな説話文学であります。ながい年月、わたくしたちの祖先の人びとのあいだにかたりつたえられた、これらのお話が、簡潔でそぼくなかたちで、まことにいきいきと書かれています。わたくしたちの祖先の、はつらつとした生きかた、かんがえかたが、目のまえにうかぶようにえがかれていきます。神がみの威力をおそれながら、しかし、いっぽうでは、かぎりない、人間らしい愛情をかたむけながら、うつくしい文学の世界をつくりあげています。

と、文学作品としての評価を与える。その関心は、

これは、神代の世界ばかりでなく、人の世の世界になっても、まだ、ゆたかにただよいつづけています。ゆうめいなイワレヒコの話でも、ヤマタケルの話でも、いろいろな悪人のほか、神がみ(まつろわぬ神)があらわれてきます。人の世になつてから、神があらわれてくることは、非現実的におもわれますが、そうした神がみあらわれても、すこしもふしぎにおもわなかった。当時の人びとの気持ち、読みとるべきだとおもいます。

と、神を見いだし、ともに生きた人間の理解にまで発言が及ぶ。それらを含んで

しかし、「記紀」のおもしろさは、なんといっても、神代のお話です。国のはじめから、天皇家の始祖である神武天皇のうまれるまで、そこにでてくる神がみのうごきは、国のはじめにふさわしい話の連続です。この本を、『神代の物語』と名づけたのも、その意味からです。と、神話部分の評価する。

中央の『古事記』『日本書紀』に対して、『風土記』を取り上げ、『古事記』や『書紀』が書かれたころ、国内におけること、地名の由来、産物、民間伝承などを書いて、書物にしようという気持ちがおこってきた。そこで、諸国にめいじて、その国内のことを記録して献上させたのが、「風土記」です。

しかし、いまでは、ぜんぶはつたわらず。わずか、出雲、播磨、常陸、肥前、豊後の五か国のぶんだけがのこり、そのほか、三十余か国のものが、わずかに、断片だけのこっています(これを、ふつうに、「風土記逸文」といっています)。

これらの「風土記」は、中央で書いた「記紀」とはべつに、地方にわたった伝承がうかがわれる、とうとい書物です。

と、地方の「伝承」の存在にまで関心を向けている。

内容は、「天のはじめ 地のはじめ」から「海幸彦 山幸彦」までを第一、「金色のトビ」から「白鳥の皇子」までを第二、それ以下を第三と分ける。その上で、

第一の八編の話は、いわゆる、日本神話で、「記紀」のうち代表的なものであり、どの話も、「記紀」のどちらにものっています。いくらか、話の順序のかわっているとありますが、ぜんたいに「書紀」のほうが、「古事記」より詳しく書かれています。

第二の「金色のトビ」以下五編は、天皇の御代になつてからのお話です。「金色のトビ」「七おとめ」は、神武天皇、「三輪山の神」は、崇

神天皇、「サホヒメの死」は、垂仁天皇、「白鳥の皇子」は、景行天皇のところに、それぞれ、でているお話です。

第三のお話は、小さいお話の群れで「風土記」から十一編、「記紀」から七編、それに、ゆうめいな「ユーカー」から二編、おさめてあります。「風土記編」の「富士山と筑波山」「夜刀の神」「白鳥の里」は常陸、「国びき」「ワニにくわれたむすめ」は出雲、「捨て子をしようとしたオオナムチ」は播磨、「オトヒヒメコ」は肥前、「シカの夢知らせ」は摂津、「浦島子」「天女」は丹後、「北海の神」は備後の、それぞれの「風土記」にのっているものです。このうち、「浦島子」は、いまの「浦島太郎」、「天女」は、いまの「羽衣」と比較すれば、なお、興味ふかいこととおもいます。

つぎの「記紀編」の七編は、第二部にはいらぬ小品ばかりあつめてあります。「時じくの香の木の実」(垂仁天皇)、「アメノヒボコ皇子」(記は応神天皇、紀は垂仁天皇)、「春の神と秋の神」(応神天皇)、「メドリの王」(仁徳天皇)、「枯野船」(記は仁徳天皇、紀は応神天皇)、「アカイコの歌」(葛城山のイノシシ) (雄略天皇) です。

さいごの二編は、かつて、内地にも住んでいたアイヌが、こんにちまでつたえてきた、世界的大叙事詩「ユーカー」からとりあげてあります。これは、もちろん、「記紀」などの系統とは、まったく異なつたものですが、民族の宝という意味から、くわえられたものです。

と、出典を丁寧に挙げています。その執筆には、

なお、記紀のどちらにものっている話は、この本にあたらしく書くにあたって、両方を参考にしながら書いてあります。これは、とくべつな記紀の研究ということではなく、日本の国に、むかしからつたわつてきたお話をつたえるという意味と、みなさんがたの興味ということから、もとのかたちをこわさないように、じゅうぶん注意しながらあつかつてあ

ります。

と、「日本の国に、むかしからつたわつてきたお話をつたえる」ため、『古事記』と『日本書紀』を参考にすることが、方法化されていることが断られている。

これらの話は、文字どおり、日本の宝物というべきものです。こうしたお話を、千年以上もまえに、文字にうつしていたことは、まったく、世界にほこつてよいことだと思ひます。

と、千年以上前の「お話」を書き留めていることが評価される。

そうした『古事記』と『日本書紀』は、ともに大和朝廷の側によつて編まれたことによる偏向性があるとして、『風土記』や「ユーカー」から、地方の説話が組み合わせられ、子どもたちに伝えるべき神話の構築がはかられているところに、強い志向性が認められる。編集にそのような方法が選ばれた理由は、

ところで、この「記紀」は、戦争まえ、戦時ちゆう、とくに、不自然な読み方をしいられてきました。精神的な自由をそくぼくするようなあたえかたをしてきたのです。わたくしも、そんなことで、たいそううくらい気持ちにさせられた記憶があります。しかし、わたくしは、このうつくしい偉大な叙事詩は、もっと、すなおに読まれなければならない。すなおな心で、たのしく読むことこそ、千年まえのひとたちがのぞんでいたことなのだ——とおもっていました。

いまでも、わたくしは、そう信じています。この本にある、これらの話を、みなさんも、たのしく読んでくださることをのぞんでいます。

と、戦時中にもたらされた理解のゆがみを正そうとする力が働く。それが「特別な研究」としてではなく、「わたくし」という個人の立場から問い返されたのが、一九六六年「昭和四十二」の『神代の物語』(以下、「坪田前掲書」と記す)に表現された再話であったと捉えられる。

松谷前掲③書が末尾に記す「初出と底本」には、所収する「第二部…神話」の多くに、坪田前掲書が初出として掲出されている。その執筆を担当したことが、松谷前掲①書の神話観を築く基礎となっていることが知られる。

二、松谷みよ子の『日本の神話』1と2の特徴

坪田前掲書と比較すると、松谷前掲①書は神話部分のみを1としてまとめる。その目次は次のとおりである。

国うみ／ヨモツヒラサカ／三人の神々／あれるスサノオ／アメノイワト／ヤマタノオロチ／国びき／ふくろをせおった神／オオナムジ、根の国へ／へびのむらや／アメノヒボコ／こびとの神／天からのつかい／国ゆずり／ニニギあまくだる／コノハナサクヤヒメ／ウミサチヒコヤマサチヒコ／隼人舞いのおこり／ワタツミノヒメ／解説

坪田前掲書と異なるように見えるが、二重線で示した「国びき」が、『出雲国風土記』から選ばれているところに共通点を認めることができる。点線で示した「アメノヒボコ」も、記される位置は異なるものの、坪田前掲書にも含まれている。実線で示した「こびとの神」は、『播磨国風土記』からオオクニヌシとスクナビコナのがまん比べの話が加筆されているのだが、坪田前掲書の「ふくろをせおった神」の中にも相当する話が含まれている。松谷前掲①書の1の内容は、坪田前掲書の中に網羅されているといつてよい。

松谷前掲①書の2は、坪田前掲書の「金色のトビ」以降と比較することができる。その目次は、

ヤマトタケル／赤神と黒神／つばきの湖／春の神と秋の神／ソミンシヨウライ／白鳥の里／枯野というふね／夜刀の神／刀我野のしか／アカイコのうた／もちのまと／にぬりの矢／わにくわれたむすめ／小さなオキクルミ／いうことをきかなかった子／えぞいたちの女神／解

説

と、歴史を強く感じさせる部分を省いて、「白鳥の皇子(ヤマトタケル)」「夜刀の神」「白鳥の里」「ワニにくわれたむすめ(わにくわれたむすめ)」「シカの夢知らせ(刀我野のしか)」「北海の神(ソミンシヨウライ)」「春の神と秋の神」「枯野船(枯野というふね)」「アカイコの歌(アカイコのうた)」「エゾイタチの女神(えぞいたちの女神)」「いうことをきかない男の子(いうことをきかなかった子)」のように、多くの内容を重ねることができる。『古事記』『日本書紀』や『風土記』ばかりでなく、「エゾイタチの女神(えぞいたちの女神)」のように、別途蒐集した民間伝承を加えているところにも共通した編集の方法が見出される。

松谷前掲①書の「解説」に目を向けてみよう。長いので、便宜的にいくつかに分けて見てゆく。

『古事記』『日本書紀』『風土記』を紹介する部分は、

「古事記」は天武天皇が、これらのいいたえが、あまりにも多く、いつわりがあるのを憂え、正しいとおもわれるいいたえを、稗田阿礼という舍人に命じて、読み習わせました。阿礼はこの本の中にもでてくるサルメノキミの末といわれ、このとき、年は二十八歳、どんな文章でも一度でよみこなし、一度聞いたことは、わすれなかつたとつたえられています。この阿礼が女性であったということは、興味深いことです。

その後、元明天皇の代になって、阿礼が読み習ったものを、太安万侶が選び、七十二年これを完成させました。

「日本書紀」はこのあと、八年たつてから、元正天皇の時代にできたものです。編者は舍人親王・太安万侶で、「古事記」より長い時代にわたって書かれ、一つの事がらについて、さまざまのいいたえをならべて書いてあるのが特徴です。

「風土記」は、おなじころ、諸国に命じて、土地の名のいわれや、産

物、いったえなどを残すべく、土地の人々に書かせたもので、地方色ゆたかなものです。残念なことに、この風土記は五つの国しかなく、あと、三十余か国のものが断片として残り、「風土記逸文」とよばれております。

と区別して記すところに、坪田前掲書の水藤「解説」との類似が見出される。

この巻におさめた「日本の神話」は、あらましの流れを「古事記」上巻、神代の巻によっております。しかしそれだけではなく、「日本書紀」「風土記」の中からも選び、構成しました。また現在、その土地で語られている事からによっている点もあります。

と、示された執筆姿勢も一致する。その理由を、

なぜかといいますと、「古事記」にはないが、「日本書紀」に語られている話があること、「古事記」「日本書紀」が大和朝廷の手で書かれたものであるため、出雲系の神々の国づくりが、あまり書かれていないこと、また、古事記におけるアメノヒボコのように、時期がひどくずれたところへ、とつぜんでてくる話があること、それらの点から、出雲系の神々の話を「風土記」からとり、天と地と、タカマガハラとアシハラノナカツクニと、対比させてすすめてみました。

と記す中に、『古事記』と『日本書紀』が、大和朝廷側の記した文献であるための偏りを持つことを指摘する点にも、水藤「解説」の理解との接点が認められる。

わたしは日本の神話が好きです。けれども、わたしが育った時代には、神話は、動かすことのできない歴史として教えられてきました。その思い出は戦争につながり、ある時期、わたしは神話を拒否しました。そうした現象は、おそらくわたしだけではないと思います。

しかしその後、「古事記」その他にふれ、また第二巻におさめた地方神話にふれたとき、日本の神話の大らかさ、無邪気さ、人間らしさに魅

せられました。ヨモツヒラサカに残るすさまじいまでの人間の愛と真実、母なくして生まれたはずのスサノオが、母をもとめてなきさけぶくんだり、オオクニヌシとスセリヒメのめぐりあい、国びきの雄大さ、コノハナサクヤヒメのかなしみなど、古代人の心が、いきいきと時代をこえて、胸に迫ってくるのを感じます。

と、坪田前掲書の執筆や民間伝承等の採録や編集に携わった経緯から、『古事記』や『日本書紀』、『風土記』に記された神話も、大らかさや無邪気な人間らしさをもって読むことができるようになった経緯を記す。そうして、わたしは、日本の神話を歴史と混同することなく、昔話をたいせつに思う心とおなじ心で、たいせつにしたいと思うのです。

と、戦前の理解とは明確な区別をもって、「昔話をたいせつに思う心とおなじ心で」日本の神話を再話したと記すところに、独自の執筆姿勢が示されている。

松谷前掲①書の「解説」の冒頭には次のようにある。

わたしたちは、むかしむかしではじまる、昔話を持っています。それは、遠いはるかな昔から、語りつがれ、語りつがれ、現代に残されてきた、目には見えないけれど、たいせつな宝といえましょう。

日本の神話もまた、このように語りつがれてきたものです。わたしたちは現在、各地に残された遺跡から、日本列島がどのようにして形成され、日本民族がどのようにして住みついていったかを調べ、学ぶことができます。しかし、古代に生きた人々に、そのようなことはできません。そのかわり古代人たちは、自分たちの、ゆたかな想像力や、願い、おそれ、祈りから生まれた、国生みの話や、神々の物語を語りついでくれました。これらのいいつたえを記したものが、「古事記」であり、「日本書紀」であり、「風土記」なのです。

と日本の神話を、「昔話」と同様に、「語りつがれてきたもの」と位置づけ、

『古事記』『日本書紀』『風土記』を「いいつたえを記したものと捉えているところに、日本の神話への理解の仕方が示されている。

松谷前掲③書の「あとがき」には、坪田前掲書を記した頃の生活が、信州に続いて秋田、和歌山と、民話探訪及びその整理は、一九五六年から数年間集中して行われた。日本を何も知らない自分に愕然とし、この手でじかに触れるような実感で日本を知りたい。という衝動に駆られての旅であった。心象世界というときこえはよいが心の奥深くのぞきこむようにして小さな童話を書いてきた私には、めくるめくような魅力に満ちた世界であった。

師・坪田譲治から日本の伝説をまとめる仕事を頂戴したのは、そのあとのことだった。早大童話会出身の大川悦生さんと私がこの仕事にかかわることになった。当時は新人の本など出版される状況になく、何年目かに一冊、自分の本が出れば仕合わせだった。だからみんな貧乏だった。葛飾区金町の太郎座という劇団が私の家だった。四畳半の板敷きに大きな切りごたつがある。その周囲にぎっしりと資料を積みあげて書いた。私の守備範囲は、北日本と東日本を半分ということだったが、何と面白かったことだろう。私が日本の伝説に、さきにあげた三つの県より、もうすこしひろく触れることができたのは、この仕事のおかげである。

次の、出合いは、講談社から日本の民話をまとめる仕事を頂戴したことである。昔話を三巻出し、神話を二巻、次に伝説を五巻、出版した。一九六七年より七〇年までの仕事である。

と回想される。「民話探訪及びその整理」に大きな魅力を感じていた作者にとつては、神話もまた、「昔話」や「伝説」と同じ位相で受け入れられた様子を見て取ることができる。

坪田前掲書の本文の冒頭が、

とおい、とおい、むかし。

天と地がまだわかれていなかった、とおいむかし。あたりは、ただぼんやりと、ふかい霧のようなものにつつまれていました。その霧のようなものは、うずをまき、ながれ、あるときは、たゆたゆとただよいながら、どれほどながい時間が過ぎていったことでしょうか。

と書きはじめられているのに対して、松谷前掲書①書の1は、

とおく、はるかなむかし。

天と地が、まだわかれていなかったむかし、あたりはただいちめん、ふかいきりのようなものにつつまれていた。そのきりのようなものはうずをまき、ながれ、あるときはたゆたゆとただよいながら、かぞえることのできない、ながいときがすぎさつていった。

と記す。記述の類似が、同一の執筆者を想起させよう。

ただし、波線部に留意すると、文末は民間伝承が語られるように表現されている。松谷前掲①書が、「昔話を大切に思う心とおなじ心で」と、日本の神話を再話している様子が文体に示される。

三、当該書の位相

当該書は、坪田前掲書の執筆に関わりはじめてから、松谷前掲書①②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿で再話された日本の神話の最終の形となる。その目次は整理され、

天地の始まりのお話

国生み／ヨモツヒラサカ／三人の神々／あれるスサノオ／アメノイ

ワト／ヤマタノオロチ／国引き

地上をおさめたオオクニヌシのお話

ふくろをせおった神／オオナムジ、根の国へ／へびの室屋／アメノヒ

ボコ／こびとの神／天からの使い／国ゆずり

アマテラスの子孫が地上をおさめたところのお話

ニニギ天下る／コノハナサクヤヒメ／ウミサチヒコヤマサチヒコ／

隼人舞の起こり／ワダツミノヒメ

が、松谷前掲①書の1を継承している。

高千穂から大和へうつったあとのお話

ノミノスクネ／aヤマトタケル／b討伐の旅に／c熊襲の国へ／d

出雲国へ／e東の果てへ／fオトタチバナヒメ／g山の神のいかり

／hタケルの最期／i白鳥になったタケル

には、「ノミノスクネ」が新たに書き下ろされている。相撲の起源となり、埴輪の起源を語る内容が加えられた。松谷前掲①書の2からは、「ヤマトタケル」が採用され、bとiの小見出しが新たに施されている。

松谷前掲①書の2の「解説」には、

日本の神々や、古代英雄の中でも、ヤマトタケルは、日本人の心情にあうのか、とりわけ愛されてきたようです。兄の死という重荷を背負い、父にうとまれて、西にたたかい、東にたたかい、たたかいつかれて死んでいく若い王子のたましいは、白鳥となって無限の空へ天かけていきます。この悲痛な一生を、宝石のようにちりばめられているのが、ヤマトタケル・オトタチバナヒメ、そしてまた火をたく老人などの、数々の歌です。ヤマトタケルとくらべて、すぐ思い出されるのは、スサノオです。スサノオも、もって生まれた力や、はげしい心から、タカマガハラを追われていますが、またその力ゆえに、ヤマタノオロチを退治し、クシナダヒメとしあわせな生活にはいります。あの有名な、

八雲立つ 出雲八重垣 つまごみに

八重垣つくる その八重垣を

という歌をよむとき、きららかにわきたつ雲をながめてたつふたり、みちたりたしあわせに、ほっと吐息をもらすのは、わたしばかりではないと思います。しかし、ヤマトタケルに、このしあわせはありません。父王の命にしたがって、たたかいつづけた若い王子は、死に

よって、ようやくときはなたれ、白鳥となつてとびさるのです。それを考えるとき、ヤマトタケルの物語が、人々の心に共感をあたえつづけてきた意味がわかるように思います。

とある。当該書に収められた理由も変わるまい。

松谷前掲①書の2は、『古事記』や『日本書紀』『風土記』に記された内容と、民間伝承を混在していたが、当該書は「日本各地に伝わるお話」と新たな見出しを立てて区別している。

赤神と黒神／つばきの湖／ソミンショウライ／もちのまと

と選定された四編は、「赤神と黒神」が、坪田譲治著『日本童話全集9 ふるさとの伝説 北日本編』（一九六〇年〔昭和三十五〕六月あかね書房）に「赤神と黒神のけんか」と題して収められている。「椿の湖」が、坪田譲治著『日本童話全集12 ふるさとの伝説 東日本編』（一九六〇年〔昭和三十五〕十二月あかね書房）に「八万八千才のツバキ」と題して収められている。前掲した回想によると、いずれの編集も当該書の作者が担当している。松谷前掲①書の2の「解説」には、

「赤神と黒神」「つばきの湖」は、「古事記」にも「風土記」にもおられない、まったくの地方神話です。このようにおらかな、土においのする神話が、もつともつと各地に残されているのではないかと思います。なかなかみあたりません。負けた赤神がかわいいといつてあとを追う女神、かなしみのあまり国が二つにさけてしまふほど、大きなため息をついた黒神、まことに魅力的な神々の姿です。

「赤神と黒神」は、大正年間採集された高木敏雄氏の資料、また近年、秋田の民話編集の際、瀬川拓男氏による採集によっております。

と、蒐集された伝承の中に見出された神話と『古事記』『日本書紀』『風土記』に残された神話が、同じ位相で扱われている。

「つばきの湖」の話を、わたしは終戦後の干潟でききました。柳田国男

先生の本を集め、民俗的なものに興味をもって友人が、まっかなつばきのさいている林を歩きながら、わたしに話してくれたのです。そのころわたしは、土地につたわる話などいっこうに興味がなく、気のない顔でできて友人をかなしませたようです。その後、地方の資料で確認しましたが、その日から幾星霜をへて、そのときの物語をかの子にわたすことができることを、ありがたいことに思います。

と選ばれた作品が、採録から執筆、掲載まで、作者が直接携わったものの中から選ばれている様子をうかがわせる。作品への思いの強さは、いずれも、

松谷みよ子文 丸木位里絵『赤神と黒神』むかしむかし絵本(二八)

一九六九年(昭和四十四)十月ポプラ社

松谷みよ子責任編集『椿の湖―地球環境と民話 地球環境と民話―』民話の手帳 日本民話の会 一九九二年(平成四)十一月 童心社

と、個別に刊行されているところにも知ることができる。

「ソミンショウライ」は、

「備後国風土記」に書かれてあります。よくにた疫病神の話が民話に残っております。また、近い時代の話として語られる弘法大師が年越しの夜たずねて、まずしいが心やさしい人たちにしあわせを残していく話など、一連の「大歳の客」とよばれる物語の、これは先祖に当たる話ではないかと思えます。

と解され、「もちのまと」には、

「豊後国風土記」と、「山城国風土記」に残る話からまとめました。

ここでも、白鳥がとびたちますが、古代人にとって、白鳥は人間の靈魂の象徴だったのでですね。多くの人々の労働の結晶である、もちをまとにするという、長のおごりたかぶった心を見たとき、もちは白鳥と なってとびさっていかなくてはならなかったのです。

と記されている。ともに『風土記』からの再話とされているところに共通点

が見出されるのだが、いずれも逸文であるだけにその判断には慎重な検討が要されねばならない。「備後国風土記」逸文に残された「疫限の国つ社」の由来は『風土記』に記されていた可能性が認められているが、『山城国風土記』逸文として記された「南鳥部里」の話と、『豊後国風土記』逸文として記されたに餅の的が白鳥になる話は、『風土記』より後に記された可能性が指摘されている(5)。もちろんそれは、再話された当時の話には、まだ判別できないことであつたかもしれない。ここではむしろ、二話が坪田前掲書にはなく、松谷前掲①書にはじまる作品であることが、重視されるべきなのだろう。作者名にふさわしい内容の四編が選ばれていることが大切なことであつたのだろうと考えられる。

おわりに

当該書に記された日本の神話は、松谷前掲①書を底本に編まれているが、その神話観は、師と仰ぐ坪田前掲書の執筆と関わる中で育まれていた。

『古事記』や『日本書紀』の記す神話が、大和朝廷側によって編まれているところに偏向性を認める。ゆがめられた神話教育を受けた経験から、それを正そうとする力が働いている。『風土記』や「ユーカラ」から、地方の神話や民間伝承を組み合わせることを編集の方法として、子どもたちに伝えるべき神話の構築がはかられていた。戦後を十五年経た時点の、児童文学としての日本の神話の理解と再話の在り方の特徴を知ることができる。

松谷前掲①書は、『古事記』『日本書紀』『風土記』に記された日本の神話と地方に見出される民間伝承を同じ位相で捉え合わせ記している。伝承を想起させる語り口調を、文体として文末表現に活かした。

当該書は、『古事記』『日本書紀』等に記された神話と民間伝承をある程度整理しながらも、なお併記しているところに、一貫した主張を認める

ことができる。『古事記』『日本書紀』等に記された神話が、民間伝承を裾野にもつ古い伝承と位置づけられているところに、大きな特徴が捉えられる。

注

- (1) 市瀬雅之①「小学校国語教育に求められる『伝統的な言語文化』としての児童文学―教科書に掲載された『いなばの白うさぎ』を一例として―」(二〇二二年四月『梅花女子大学教職研究』六)は、小学二年生ではじめて出会う日本の神話が、児童文学として「再話」された作品を読むところに大きな特徴があることを指摘した。その背景には、『古事記』や『日本書紀』『風土記』等の古典作品の読解とは、やや異なる、児童文学史とでも呼ぶべき独自性が見出されることに注目する。市瀬雅之②「児童文学として再話された『日本神話』の戦前と戦後―大木雄二の作品比較を一例として―」(二〇二二年三月『梅花女子大学文化表現学部紀要』一八号)には、太平洋戦争前から戦後にかけて、日本の神話を再話し続けた大木雄二の作品の変遷を辿った。市瀬雅之③「『世界少年少女文学全集』『古事記物語』の位相―再話された日本の神話への考察―」(二〇二二年三月『梅花児童文学』二九号)には、林房雄が鈴木三重吉の『古事記物語』を支持して書き下ろした「古事記物語」の在り方を考察した。②③は、それぞれに一九五〇年代の児童文学世界において、神話がどのように再話されたのかの一部を知ることができる。本稿はこれらに対して、一九六〇年代以降の再話の一部を知ることができるよう考察を展開したものである。関連への言及はしていないが、あわせ読むことで享受史が垣間見えるように心がけてはいる。併読願えると幸いである。
- (2) 児童文学作家。一九二六年〔大正十五〕〜二〇一五年〔平成二十七〕。

一九四八年、坪田譲治に出会い師事。一九五七年、瀬川拓男と『信濃の民話』を刊行。一九六〇年、民話を素材にした創作『龍の子太郎』で、国際アンデルセン賞優良賞(一九六二年)を受賞等。

(3) 坪田譲治は、一八九〇年〔明治二十三〕三月三日生。

(4) 水藤春夫は、一九一六年〔大正五〕〜一九九一年〔平成三〕。日本の児童文学作家。早大童話会に所属。坪田譲治に師事。「びわの実学校」同人。赤い鳥文学賞選考委員等。

(5) 植垣節也校注・訳 新編日本古典文学全集『風土記』(一九九七年〔平成九〕十月 小学館)は、逸文を『風土記』にあったであろうものと、後の記述であろうと思われるものを判別して掲載している(廣岡義隆担当)。